
バカとバスケットと召喚獣

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとバスケット召喚獣

【Nコード】

N5239Y

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

「明久。一緒に小学校に行かないか？」突然の雄二の一言。最初は「雄二。さすがにロリコンはマズイと思うよ」と思った明久であったが、雄二と翔子の小学校の頃の先生の頼みで、小学校の女子バスケ部のコーチを頼まれるが……

第1話 小学生たちとの出会い（前書き）

というわけで、活動報告で伝えたとおり、バカとバスケットを全部消し、新しく書くことにしました。ちなみにとある理由で姫路と美波の二人は全然出ません。

第1話 小学生たちとの出会い

その出会いは雄二の一言からであった。

「明久。少し頼みたいことがあるんだ。」

「ん？どうしたの雄二？」

休日のある日、明久の家に遊びに来ていた雄二が突然頼みごとをしないできた。明久はどうせ、またくだらないものだと思っていたが……

「明日の放課後、一緒に小学校に行かないか？」

「……………」

雄二の突然の発言を聞いて、明久は携帯に手を伸ばし……………

「あ、もしもし、霧島さん。雄二がロリコンに……………」

「待ってくれ、明久。誤解だ！」

「霧島さん。今すぐ来てくれるって」

明久がとてもいい笑顔で言うと、雄二は明久の胸ぐらを掴み、

「お前、頼むからそういうことは……………」

ピンポン

突然呼び鈴が鳴り出した瞬間、雄二の体は凍りついた。

「霧島さん、来たみたいだね」

「くそ、明久。この恨みは忘れないからな」

「……雄二。小学生に恋するのは良くない。」

黒いオーラを出した霧島さんが雄二の顔を掴んで言った。それから数十分後僕の部屋は赤い血で染まるのであった。

雄二が蘇生し終わり、事情を聞くことにした僕。ちなみに霧島さんも一緒にいた。

「たくっ、明久のせいでひどい目にあっただぜ。」

「いやだって、いきなりあんなことを言われたら誰だってそう思うよ」

「……吉井の言うとおり。」

「だからってな。まあいい。実はな俺と翔子の小学校の頃の担任から連絡あってな。いまその担任の知り合いがいる慧心っていう学校

でバスケのコーチを頼まれたんだ。」

「バスケの？でも、雄二って有段者とかじゃないよね。なのにどうしてそんなこと頼まれたの？」

僕がそう聞くと雄二は何故か渋い顔をしていた。すると雄二の隣に座っていた霧島さんが代わりに答えてくれた。

「……その私たちの担任の知り合い、美星っていうんだけど、その人の甥っ子さんにもコーチを頼んだんだけど、その人だけじゃちょっと手が足りないから……」

「ようするにだ。俺たちはその手伝いをするということだ。俺と翔子は小学校の時に世話になったから手伝うことにしたんだが、折角だから明久たちにも手伝ってもらおうかと思ってな。」

雄二が笑顔でそう言っていたけど、僕は雄二に耳打ちをした。

「それで、実際は？」

「翔子と一緒にいたら命がいくらあっても足りないからな。明久たちも巻き込んでしまえって思ったんだ。」

雄二、そこまで霧島さんと二人っきりになるのが嫌なんだ。でも、バスケか。少し面白そうだからコーチやってみようかな。

「僕はいいいよ。秀吉やムツツリー二にも頼もうよ。それに姫路さんや美波にも」

「秀吉とムツツリー二は既に頼んだ。二人も最初、俺のことをロリ

コン扱いしてたけどな。姫路と島田は放課後ちよつと残れないらしいから参加しないってよ。」

「そっか、とりあえずそのコーチしに行くのはいつくらいなの？」

「今週の月・水・金だ。学校終わったらその甥っ子と途中合流して、小学校に行く。」

「うん、分かったよ。」

こうして僕はバスケのコーチをすることになった。

そして次の日の放課後、雄二と霧島さんの担任の知り合いの甥っ子との待ち合わせ場所に来た僕ら、そこで待っていたのは……………

「あつ、どうも、初めまして。長谷川昴です。って明久」

「甥っ子って昴だったの？」

僕の顔を見て驚く昴。僕も結構驚いていた。するとどういふ関係か気になっていた女の子にしか見えない男の子、木下秀吉が聞いてきた。

「明久よ。そっちの甥っ子とお主はどういう関係なんじゃ？」

「うん、僕の家近所に住んでいる人だよ。」

「それにしても、ミホ姉からコーチの手伝いのする奴が来てくれるって聞いたけど、まさか明久だったとはな。」

「まあ、本来は雄二が頼まれたんだけどね。」

僕と昴の二人がそんなことを話していると、雄二がバス停の前で大声で呼んでいた。

「おい、早く行くぞ。バスに乗り遅れるぞ」

「遅刻したら洒落にならないね。早く行こう。昴」

「ああ、そうだな。」

久しぶりにあった昴だけど、何だか様子がおかしい感じがした。一体どうしたんだろう？この間会ったときは凄くバスケに燃えてたけど……

バスに乗ってしばらくし、目的地である慧心学園にたどり着いた僕ら、そして学園の門をくぐり、体育館の扉の前に来ていたけど……

「なあ、明久。」

「何？ 昴？」

後ろにいた昴が何かを聞いてきた。それは……

「あそのカメラ持つてる奴。大量に鼻血出してるけど、大丈夫なのか？」

昴が言っていた人物はムツリーニだった。本名は土屋康太。通称『寡黙なる性職者』色々と盗……撮影や盗……録音機器の機械などにも詳しく、さらにはエ、保健体育に詳しくたりするけど、本人はそれを認めていなかったりする。ちなみに実際のエロいことに対して免疫がなく、鼻血を出していたりする。

「まあ、昴もそのうち、なれるよ。」

「あんまり慣れたくないけどな」

「ほら、無駄な話してないで、早く入ろうぜ」

雄二がそう言って、とりあえず僕らは体育館の扉を開いた。その先には……

「」「」「お帰りなさいませ、ご主人様&お嬢様！」」「」

「」「えっ？」」「」

「ぎゃあああああああ！」

「……………目の毒」

扉を開けた先にはメイド服を来た五人の少女たちだった。そしてその瞬間、霧島さんが雄二の目を潰していた。

第1話 小学生たちとの出会い（後書き）

とりあえず、姫路さんと美波の二人は原作三巻の話で登場させるつもりです。次回はまあ、自己紹介話になりますね。

第2話 初日からドタバタ騒ぎ（前書き）

まあ、今回は自己紹介回になります。

第2話 初日からドタバタ騒ぎ

体育館に入った瞬間に、メイド服の少女が5人待っていた。ちなみに雄二は霧島さんに目を潰されて、凄く痛そうにしていた。

「あの、あの人、大丈夫なんですか？隣の黒髪の人に目潰しされていたような……」

するとピンク髪の女の子が雄二の事を心配そうに聞いてきた。まあ、確かに僕らの場合は日常茶飯事だから慣れてるけど、この子達の場合にはちよつと刺激ありすぎだよな。

「大丈夫だよ。雄二はああいう風にやられるの慣れてるから」

「え、あの、」

「とりあえず自己紹介でもしよっか。」

「はあ、」

まだ納得行っていないみたいだけど、このままこの子が雄二の心配してる……

「雄二、何、小学生に心配かけてるの？」

「待て、翔子。首を………」

死ぬ可能性が高くなるからね。

とりあえずお互いの自己紹介をすることになった僕ら、まずは女バスマンバーから

「け、慧心学園初等部、湊智花です」

「同じく、三沢真帆です」

「永塚紗季です」

「か、香椎愛莉…です」

「ひなた、袴田ひなた」

「せーの…」

「」「」「よろしくお願いします！ご主人様。お嬢様」「」「」

五人が礼儀正しく礼をしていた。でも、少し気になることがあった。

「あの、そのご主人様はちょっと……」

「うん、さすがにバスケのコーチなのにそれは……」

僕と昴の二人がそう言うと、真帆ちゃんがむくれて、

「ええー、いいと思ったんだけどな。」

「それじゃあ、お兄ちゃん」

まあ、まだそっちの方がマシな気がするからいいか。とりあえず、僕らも自己紹介しなきゃ、

「えっと、それじゃあ、俺からだな。俺は長谷川昂。知ってると思うけど、ミホ姉……美星先生の甥っ子だよ。」

昂くんは普通に自己紹介してた。お次は僕だな。

「僕は吉井明久。よろしくね。」

至って普通の自己紹介をしたけど……

「ね、あの人バカっぽくない？」

「ダメよ、真帆。あんまりそんな事言っちゃ」

「おー、バカっぽいお兄ちゃん」

真帆ちゃんの一言で、何だか僕の心がすごく傷ついたよ。あれ？何だか涙が……気のせいだよな。

「まあ、明久よ。小学生にバカ呼ばわりされて泣くんじゃない。次はわしじゃな。わしは木下秀吉じゃ。」

「ねえ何である人、女性なのに男物の制服来てるの？」

「きっと男に生まれたくて男の制服を着ているんだよ」

「いや、ワシは……」

「ほら、自分のことをワシと言ってるしね」

「そこは関係ないと思うのじゃが……」

またまた真帆ちゃんの一言から始まった。でも、しょうがないよね。秀吉はどっからどう見ても男には見えないからね。」

「明久よ。お主、何かおかしな事を考えてないか？」

「気のせいだよ。秀吉。秀吉は小学生でも女の子にしか見えないって思われてもしょうがないって、思ってるよ。」

「やっぱり、おかしな事を考えていたではないか。」

次はムツツリーニの番だけど……

「なあ、明久。さっきからあそこで写真撮ってるけど、犯罪にならないのか？」

昴はそう言うと、僕は昴が見つめる方を見るとムツツリーニは智花ちゃんたちのメイド服を熱心に撮影してる。

「……………これで需要が……」

「ムツツリーニ。それ、一応言っておくけど、犯罪だからね。」

僕が写真を撮っているムツツリー二言うと、ムツツリー二は思いきり首を横に振る。

「おもいつきり否定してるが、みんなにバレバレだからな」

「……………これ口止め料」

ムツツリー二はそう言って、昴くん一枚の写真を渡した。その写真に映っていたのは……………着替え中の女子高生の写真。

「これ、盗撮だろ！！というか、口止め料って」

「あの、何の写真なんですか？」

智花ちゃんが昴が持っていた写真を見ようとしたけど、昴くんが一瞬の内にその写真をビリビリに破り、ゴミ箱に捨てた。まあ、あんなの見たら卒倒しちゃうよね。

「とりあえず、見た通りだけど、さっき写真取ってたのは土屋康太っていうんだ。」

「……………よろしく。」

あとは残っているのは雄二と霧島さんだ。

「次は俺だな。坂本雄二だ。俺たちは長谷川のコーチの手伝いとして来てるからよろしくな。それで、こっちは……………」

「……………霧島翔子。雄二とは婚約者」

「おー、そうなの？じゃあ、おっきいお兄ちゃんと綺麗なおねえちゃんとは結婚する？」

「あはは、そんなことしたら、多分怖い集団に雄二がボコられたりするね。」

僕がひなたちゃんにそんなことを言っているなか、昴と秀吉は……

「なんか、明久の学校って怖いところなのか？怖い集団にボコられるって……」

「それより、袴田のおねにいちゃん。絶対言いづらいじゃろ」

そんなこんなで、お互いの自己紹介を終える僕らだった。

とりあえず昴は智花ちゃんたちにメイド服から着替えるようになっていい、智花ちゃん達が体操服に着替えて、僕らの前に来た。

「「「「おまたせしましたー」」」」」

「それじゃあ、みんな始めようか」

「「「「よろしくお願いしまーす」」」」」

昴の号令でバスケの練習を始めるのであった。基本的には昴が指導とかして、僕らは智花ちゃんたちと一緒に参加したり、個人レッスンをしたりしていた。ちなみに個人レッスンの相手は

智花ちゃん&秀吉ペア

真帆ちゃん&僕ペア

紗季ちゃん&霧島さんペア

ひなたちゃん&ムツツリーニペア

愛莉ちゃん&雄二ペア

でやることとなった。それにしても、ムツツリーニ、ひなたちゃんに教えてるのはいいけど何だかたまに隠し撮りしてるのは……

そんなことを心のなかで突っ込みを入れていると真帆ちゃんがあることを聞いてきた。

「ねえねえ、あっきー？」

「あっきー？ああ、あだ名？何？真帆ちゃん」

「さっき、すばるんに言われたんだけど、おふえんすって何？」

「オフエンスっていうのは攻撃のことだよ。ディフェンスは守り」

「おお、バカそうに見えて意外と知ってるんだね。あっきーは」

真帆ちゃん、結構一言が多いよ。それに……

「馬鹿な。明久がオフエンスの事を知っているだ」と

雄二も僕の事をどれだけ馬鹿にしてるのさ。それぐらい知ってるからね。

とりあえず練習を続けていると、雄二が愛莉ちゃんにあることを言った。

「そういえば、香椎は背が高いからディフェンスの方が向いてるんじゃないのか？」

「」「あ！」「」

「えぐ…ふええええん！」

雄二の一言で愛莉ちゃんが突然泣き出した。僕らは愛莉ちゃんを泣かした雄二を思いつき避難した。

「雄二、何言ったか知らないけど、土下座しなきゃ」

「小学生を泣かせるのはいかんと思うぞ」

「……………いじめかっこわるい」

「雄二、小学生泣かしちゃ、駄目」

「待て、翔子。俺も原因が……って、そっちに腕はまがら……ぎゃあああああああああ！」

霧島さんに折檻を受けている雄二。昂も心配そうに愛莉ちゃんを見ていると、智花ちゃんが……

「あの、長谷川さん。吉井さん。愛莉、身長がコンプレックスなんです。背のこといわれるとあんな感じに……」

「どうすればいいんだ？」

「とりあえず誕生日のことを言えば……」

「よし、昂。早く愛莉ちゃんを落ち着かせよう……ってムツツリーニ？」

気がつくともツツリーニが愛莉ちゃんに何か言っていた。すると愛莉ちゃんは直ぐに泣き止んだ。

「ムツツリーニ？愛莉ちゃんに何言ったのかな？」

「小学生のうちは背が伸びやすいからしょうがない。だが、直ぐに縮む。って言ってましたよ。」

紗季ちゃんがムツツリーニが愛莉ちゃんに言った言葉を教えてくれた。ムツツリーニ、意外とやるかも……

その後、愛莉ちゃんが僕らにいきなり泣いたことを謝ってきたけど、僕らは気にしてないよって答えた。それに、原因の雄二は責任持つて折檻受けてるし、

とりあえず雄二が復活し終わり、練習を続けているなか、僕はフツと智花ちゃんのシュートを見た。智花ちゃんのシュートは見事にゴールに入ったけど、それだけじゃない。シュートスタイルがとても綺麗で……見とれてしまった。そのことを昂に言う……

「智花は確か経験者って聞いたけど、あれは凄いな」

「うん、凄く綺麗だったよね。」

僕らはそのことで盛り上がるのであった。

その後、練習も終わり、昴の従兄妹の美星先生の車で昴と一緒に送ってもらった。

「いやあ、悪いね。まさかこんなに多くなるとは思ってたけど、ど、」

「たくっ、ミホ姉。確認しないから」

「僕も雄二に頼まれたときはあんまり乗り気じゃなかったけど、ちよっとコーチやる気が出てきましたよ。」

「おっ、そっちのバカそうな奴は真面目だな。なあ、昴。」

バカそうってひどい言われようなんだけど……

「でも、三日の約束だろ。」

「雄二も三日だけって言ってたけど、僕は続けてもいいと思う。」

僕がそういうと昴は何故か浮かない顔をしていた。一体どうしたんだろう？とりあえず雄二に三日だけじゃなくって、これからも続けようって相談しようと思っただった。

第2話 初日からドタバタ騒ぎ（後書き）

やっぱり雄二がひどい目に……まあ、姫路さんと美波がいなくて明久は結構ひどい目にあわないからですけどね。

第3話 脅迫文と三日目（前書き）

何だか昴の影が薄くなって来ましたけど、頑張っ
て濃くします。

第3話 脅迫文と三日目

コーチ二日目、僕は雄二にもっとコーチを続けようと言ったけど、雄二は「めんどくさい」と言って、説得に失敗した。とりあえず、僕らは二日目のコーチを続けることにした。ちなみに秀吉は演劇部の用事で来られなく、ムッツリーニは新型のカメラを買いに行つて来られない。なので、今回は僕、雄二、霧島さん、昂の四人でやることにした。

「じゃあ、シュートとパスの練習に分けようか」

昂の指示で真帆と紗季はシュート練習、智花とひなたと愛莉はパス練習に分かれた。パス練習では雄二と霧島さんがコーチ、シュート練習は僕と昂がコーチをすることにした。

昂が智香ちゃん達の練習を見てこんな事を言っていた。

「智花は経験があるから上手いな。紗季と真帆は初めてにしては上手くなっていつてる。愛莉とひなたは時間がかかりそうだな。」

「でも、みんな頑張ってるね。」

「ああ、そうだな。」

昂はそう言ってるけど、たまに浮かない顔をしている。一体どうしたんだろう？

練習を一旦終わらせ、みんなで休憩を取っていた。雄二と昴と智花ちゃんは練習メニューを見ていた。僕と霧島さんは愛莉ちゃん、ひなたちゃん、紗季ちゃんの三人と色々と話していた。

「そういえば、吉井さん達って、あの文月学園にいますよね。」

「うん、そうだよ。」

「文月学園って、あの召喚システムの？ちょっと怖いなあ……………」

「…………大丈夫。結構可愛い。」

霧島さんが笑顔でそういうと、ひなたちゃんが……………

「おー、ひなも召喚してみたい。」

「あはは、機会があったらね。」

他愛のないことを話していると、突然真帆ちゃんが……………

「困るよ!」

大声を出して雄二たちになにか言っていた。僕と霧島さんは雄二がまた変なことを言ったのか思ったけど、

「どうして!?!ゲームなら一時間でレベル3くらいいくのに……………」

「あのな、それはゲームの話だ。三沢たちの実力なら一ヶ月くらい

頑張れば直ぐに強くなる。だから……」

「一か月じゃ待てないよ!!」

「……無理なもんは無理だ。」

雄二がそう真帆ちゃんに言った。一見冷たく言ってる気がするけど、雄二の言うのは正しい。けれど、真帆ちゃんのあの必死な感じ……どうしたんだろう？

「もういい!!」

「あ……!!」

真帆ちゃんはそのまま体育館を出ていってしまった。僕は真帆ちゃんを追いかけようとしたけど、紗季ちゃんに止められた。

「ごめんなさい。吉井さん。ここは私に任せてください。長谷川さんも坂本さんもご迷惑をかけてすみません。気にしないでください。」

そう言って紗季ちゃんは真帆ちゃんを追いかけていった。僕と霧島さんはどうすればいいのか分からなかったのだった。

コーチを終えて、みんなで体育館を出ようとした時のこと、

「真帆ちゃん。一体どうしたんだろう？」

「……雄二と長谷川がきついこと言ったから傷ついた？」

霧島さんがそう言うのと雄二が機嫌悪そうに言った。

「さあな、この間の香椎の場合は知らなかったからしょうがないとしてだ。今回の件で女バスメンバー何か隠してるな。」

「隠してる？」

「ああ、その態度を見てそう思ったただけだな。とりあえず後一日だけだ。俺も今日のことは忘れようと思う。」

雄二がそう言って、靴を取った。隠してるって一体何を……ふつと昴の方を見ると昴は紙切れを見て驚いていた。

「どうしたの？ 昴？」

「あっ、いや、なんでもない。俺は先に帰るから……」

昂はそう言ってそそくさと走っていった。

「どうしたんだろう？」

僕はそう呟きながら靴を取ろうとすると靴の中に一枚の紙切れが入っていた。その紙に書いてあったのは……

『今すぐ女子バスのコーチをやめろ。さもないとひどい目にあうぞ』

僕はそれを見て、雄二に見せた。雄二は……

「これは子供の字だな。どうにもきな臭くなってきた。」

雄二の表情は険しかった。でも、いったいこんなこと誰が……

それから三日目の日のこと、今回は秀吉たちも参加できるので、六人で一緒に体育館に向かっていた。その途中、雄二が……………

「長谷川。お前もあの警告文のこと知ってるな。」

突然雄二がそんなことを言い出すと、事情を知らない秀吉とムッツリーニは……………

「警告文？　どういうことじゃ？」

「……………どんな文だ？」

「これだよ。」

そう言って、僕が二人に例の紙切れを見せると二人も険しい顔をしていた。

「これは……………冗談にしては笑えんのう」

「コクッ」

「俺のところにもその警告文あったけど、」

僕らはその警告文について話していると……………

「雄二、あれ、」

僕らは霧島さんが指を刺した方を見るとそこには小学生5人の男子が並んでいた。

「おい、女バスのコーチたちだろ。話がある」

僕らはそのまま体育館の裏まで連れてこられ、その5人からの話によると男子バスケット部のメンバーで、昨日の紙切れを書いたのは自分たちだといった。

「君たちがあの紙切れを…」

「今すぐ女子バスケット部のコーチをやめろ！さもなければ…」

「コーチなら今日で終わりだ。」

昂がそう言うのと、何故か小学生たちは驚いていた。とりあえず、僕は事情を説明した。

「元々僕らは三日の約束だから、今日がその最終日。」

「そ、そうか…」

「なんだよ竹中、脅かすなよ…」

「だって真帆がすごいコーチがいるって自信満々だったから………じゃあ、試合には………」

「試合？」

「どうやら、こいつらのほうが色々と事情を話してくれそうだな。」

雄二が笑みを浮かべながらそう言っていた。確かにあんまり事情が

わかっていない僕らには知るチャンスが来たという事かな？

男バスから試合のことなど色々と事情を聞くと……

「今度の日曜日に俺たちと女子バスケ部で試合をするんだよ。あんなたちはそのためのコーチだろう？」

「なるほどな。三沢のあの態度、納得がいった。お前らと女バスは何で試合するんだ？」

「体育館の練習場所をかけてだよ」

「体育館をかけて？何でまた、」

僕がそう言うとリーダー格の子が答えた。

「俺たちは昨年の地区大会で優勝をしたんだ。でも、実力はまだまだだから練習したいと思ってる！だけど、女バスが練習で使ってるから駄目だって……それで顧問に相談したら今度は美星と喧嘩して、いつの間にか試合で決めようって話になったんだ」

「待ってよ。一緒に練習すればいいじゃんか。なんでそんなことを……」

「はぁ？あんた、バカそうな顔してるけど、本当に馬鹿だな。」

また小学生に馬鹿にされた。けれど、落ち込む前に彼が言った言葉を聞いてそんな気なくした。それは…………

「あんなヘタクソな奴らと練習なんてできるか！アイツらのバスケットなんて…ただの遊びじゃねえか！」

「ヘタクソ？遊び？ふざけんなよ！！智花ちゃんたちは確かに今はそんなに上手くはないけれど、一生懸命練習してるんだぞ。そんな子たちの頑張りを遊びだっていうのかよ。ふざけんな！！いくら小学生とはいえ、言っている事と悪いことの区別も付かないのかよ！」

「落ち着け。明久。こんな子供に切れてもしょうがないだろ。」

「そうじゃ、たかが子供の言うことじゃ、気にすることはない。」

雄二と秀吉の二人が止めに入ったけど……………あんなことを言うのはひどいと思う。

「悪いな。竹中とやら、さっきも言ったように俺らは三日だけの約束だ。俺らの知らずの内に美星のやつに利用されただけのいわゆる被害者だ。今日で美星に頼まれたコーチの日程は終わりだからな。安心しろ」

「ちっ、分かったよ。解放してやる」

竹中がそう言って、どこかへ行ったけど、でも、僕は智花ちゃんたちの事を馬鹿にされたのは凄くむかついていた。

「雄二、いいの？このままじゃ智花ちゃん達が…………」

「まあ、元々約束だし、長谷川もそう思ってるからな。」

雄二がそう言って昴の方を見た。昴は……

「明久、俺も女バスのみんなにそこまですることは出きない……」

「……分かったよ。雄二はともかく昴までそこまで腑抜けなやつだと思ってなかった。もう勝手にしたら、僕は帰る。」

「ま、待つじゃ、明久」

「……明久」

明久はそのまま歩いてどこか行ってしまい、秀吉とムツツリーニは明久を追う。残された俺と翔子と長谷川は……

「たくっ、あの馬鹿は……」

「雄二。見捨てていいの？あのままじゃあの子達……」

「悪いが、頼まれたのは三日だけだからな。それに……」

俺は長谷川を睨むと……こう呟いた。

「長谷川、お前、どこかでもうバスケは諦めてないか？」

「えっ、」

「美星から聞いたけど、お前が通ってる高校のバスケット部。活動停止らしいな。その所為かお前はバスケット自体嫌いになりそうになってる。そうだろう」

「……………ああ、だけど……………」

「だけど、やっぱり気になるんだろう。あの子達が……………」

「そ、そうだな。」

長谷川は暗い顔をしてつぶやくと、俺はため息を付いて体育館から背を向けた。

「悪い、俺は今日は帰らせてもらう。今日のコーチはお前に任せた。行くぞ、翔子」

「……………雄二。」

俺と翔子はそのまま湊たちと会わずに帰るのであった。残された長谷川は……………

「……………」

ただ黙ったままだった。

「雄二、いいの？私は吉井の言うとおり、もう少し続けてあげたい。」

「たくつ、約束は約束だからな。守らないといけないからな。だけど………残りの一週間は勝手にやらせてもらうけどな」

「えっ？」

「男バスの連中は二つミスを犯した。一つは俺たちは馬鹿だからあんな奴らの脅しに屈せずに……勝手に湊たちのコーチを続ける。2つ目は……男バスは明久を怒らせた。明久はとんでもない馬鹿だが、馬鹿をなめたら痛い目に合うことを教えてやらないとな。」

「そう、やっぱり雄二は凄いね。」

「ふん、」

第3話 脅迫文と三日目（後書き）

とりあえず、次回は玲姉さんの登場です。明久、頑張れ。

第4話 姉とコンロ（前書き）

お待たせしました。今回は玲さんの登場です。

第4話 姉とコンロ

休日、明久は自分の部屋である本を読んでいた。

「うーん、やっぱり素人じゃ上手く教えるのは難しい……………」

「アキくん？ ちょっといいかしら？」

明久の部屋に入ってきたのは、明久の姉、吉井玲だった。明久と違ってかなり頭も良く、今は明久の一人暮らしの監視に来ているのだが、明久のことが物凄く好きすぎている。

「何？ 姉さん？」

「ちょっと……………あら？ 何読んでいるのですか？」

玲は明久が読んでいた本を奪った。明久が読んでいた本は…………『バスケット入門書』と書かれた本だった。

「あら？ アキくん。バスケットでも始めるの？」

「あ、いや、ちょっと……………姉さん。ちょっと相談に載ってもらいたいんだけど……………」

「何かしら？」

「実は……………」

明久は今、自分が智花たちのバスケットのコーチをしている事や男子バ

スケ部に言われたことを話すと…………

「アキくんがロリコンに……………」

「違うからね！話し聞いてた！？」

「まあ、冗談はさておき、アキくんはどうしたいんですか？」

「そりゃ、続けたいって思ってるよ。だって、あんなに頑張ってる智花ちゃんたちのことをバカにするなんて…………あんまりだよ。」

「そうですか。じゃあ、続けたいと思いますよ。アキくんがそう思っているんだったら…………」

「うん、分かったよ。ところで姉さん。僕に何か用なの？」

「ああそうでした。さっき料理をしようとしたら、コンロが壊れて火がつかなくなったので、今日の夕御飯は抜きで……………」

「いや、それ、ダメだよ。というか修理に出すとか考えてよ。」

明久がちよつと抜けた玲に突っ込みを入れる中、ある事を思い出した。

「そうだ。姉さん。昴の家でコンロ借りようよ。」

「ああ、さっき言っていたコーチをしてる。いいですよ。」

明久と玲の二人が食材を持って長谷川家に訪れると昴の母親七夕が出てきた。

「あら、吉井くんじゃない。どうしたの？」

「ごめんなさい。ちょっと事情があって……コンロ壊れちゃって……キッチン借りていいですか？」

「あら、でしたら今晚は一緒にお食事どうかしら？ 丁度今、昴くんがお客さん連れてくるので、」

「お客さん？」

明久がそう言うと、直ぐに昴が帰ってきた。昴の隣には智花がいた。

「あれ？ 明久。」

「おじゃましてるよ。智花ちゃんも久しぶり」

「お久しぶりです。吉井さん。」

「じゃあ、七夕さん。僕も手伝います」

「あらありがとう。」

明久が料理の手伝いをしている中、明久は昴の顔つきが変わったことに気がついた。

（何かあったのかな？）

明久がそう思っていると、昴がキッチンの方へ来て、こう言った。

「明久。俺、さっき決めたんだ。俺、男バスとの試合までコーチ続けるよ。だから……明久にも手伝いを……」

「そっか、僕も実は一人でみんなのコーチをしようって思ってたんだけど、頑張って勝とう男バスに」

「おう」

第4話 姉とコンロ（後書き）

何だかすっ飛ばしすぎてすみません。次回はコーチ再開となります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5239y/>

バカとバスケットと召喚獣

2011年12月2日21時52分発行